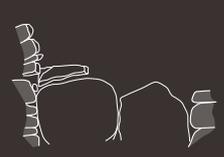


高蔵寺古墳群・高座山古墳群

－ 高座山周辺の古墳と出土遺物 －



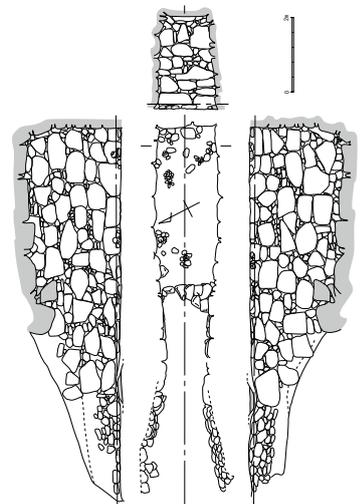


高座山と東谷山の古墳群 庄内川を隔て、右岸(春日井市)に標高194mの高座山と左岸(名古屋市守山区)に標高198mの東谷山が相対し、山中・山麓にかけて多くの古墳が分布する。1932年刊行の『高蔵寺町誌』によると「**當高蔵寺町は隣村志段味村東谷山麓と共に最も古墳に富み一帯の古墳群を見る何れも圓墳にして山腹山麓に多く之を存す。**」とする。なお、高座山には古墳時代前期から後期の古墳はなく、終末期以降に古墳群の形成が始まり、山腹尾根上に高座山古墳群5基[高座山第1～5号墳]・山麓の段丘面に高蔵寺古墳群7基[高蔵寺第1～7号墳]が確認されている。多くは横穴式石室を主体部とする直径10～15m程の小規模な円墳で、1～3基単位で分布し、古墳群としては密集度が低く散在的である。

他方、東谷山の山頂・尾根から西麓の段丘面へ、東西1.7km・南北1kmの範囲に分布する古墳を志段味古墳群と総称し、古墳時代前期から終末期にかけて、前方後円墳2基・帆立貝形古墳5基・円墳50基・方墳1基・不明8基の計66基が確認されている。古墳時代前期は前方後円墳の白鳥塚古墳(115m)⇒中社古墳(63.5m)、中期から後期にかけては志段味大塚古墳(51m)⇒勝手塚古墳(55m) / 西大久手古墳(37m)⇒大久手5号墳(38m)⇒東大久手古墳(39m)の大小2系統の帆立貝形古墳による首長墓が継続する。特に、4世紀前半の白鳥塚古墳は尾張地域最古にして築造当時最大の前方後円墳で【註】、ヤマト王権の大王墓[行燈山古墳:伝・崇神天皇陵]と共通の墳丘規格や墳丘構造(渡土堤・石英による墳丘表飾)を採用する。後期から終末期は横穴式石室を主体部とする円墳が急増するが、墳丘規模は古墳群(支群)の盟主級で直径20m前後、多くは15m以下の小規模なものとなり、東谷山山腹尾根上・山麓の段丘面に10基程度の単位でまとまって分布する。

志段味古墳群は、各時期を通じて尾張地域屈指の内容と規模を誇り、首長墓の動向はヤマト王権との密接な関係と地理的重要性を示している。一方、高座山は古墳群の様相・性格が相異なるが、「高座山第1号墳と白鳥1・4号墳」、「高蔵寺第3号墳と山の田古墳」に共通の石室型式を認め、古墳群を越えて造墓思想・古墳祭祀を共有した可能性がある。また、東谷山・高座山山麓に集落遺跡は未確認であり、集落から離れて墓域を設定し、造墓活動が継続した背景には「山」に対する特別な意識が想定される。後に尾張戸神社・高蔵神社が造営され、尾張氏の祖神を奉祀する点は古墳群と古代豪族の動向とも相まって示唆的である。

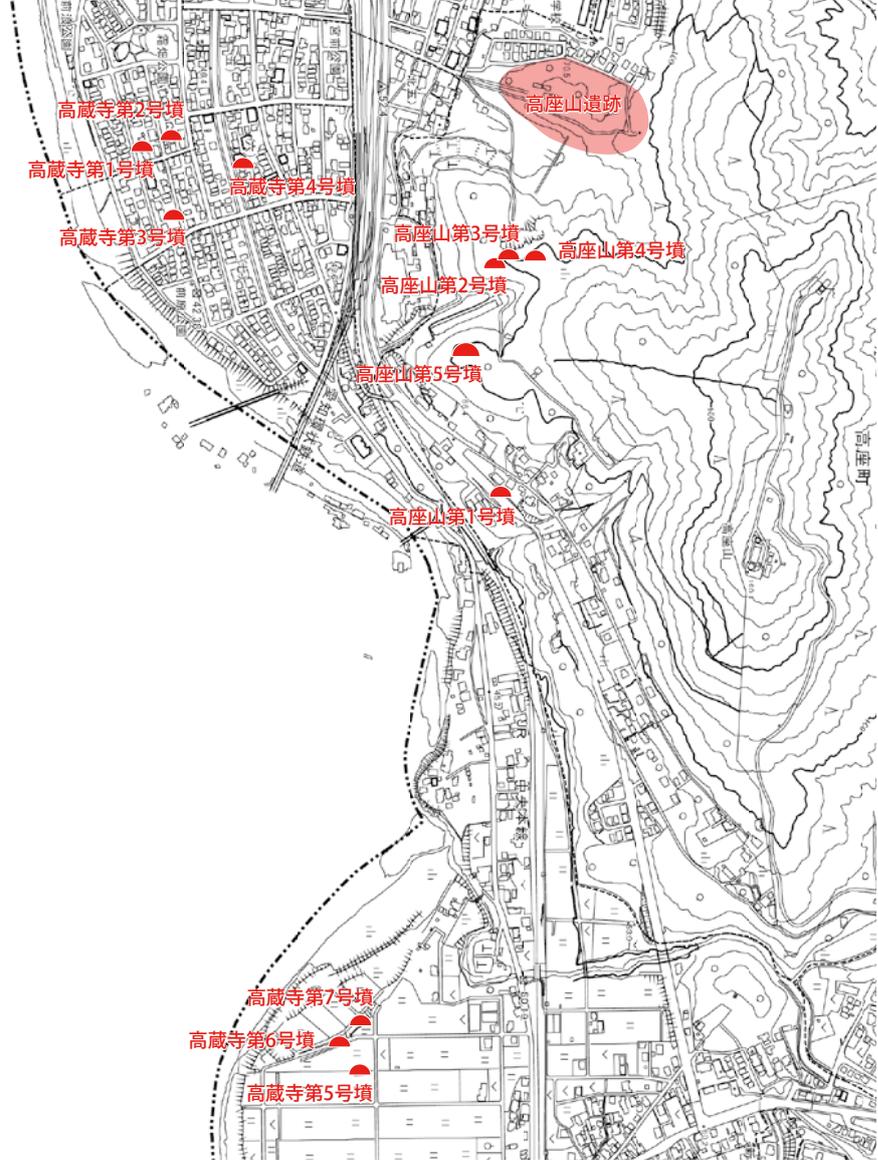
【註】全時期を通じては断夫山古墳(墳長150m・6世紀初頭)、青塚古墳(墳長123m・4世紀中葉)に次ぐ尾張地域第3位となる。



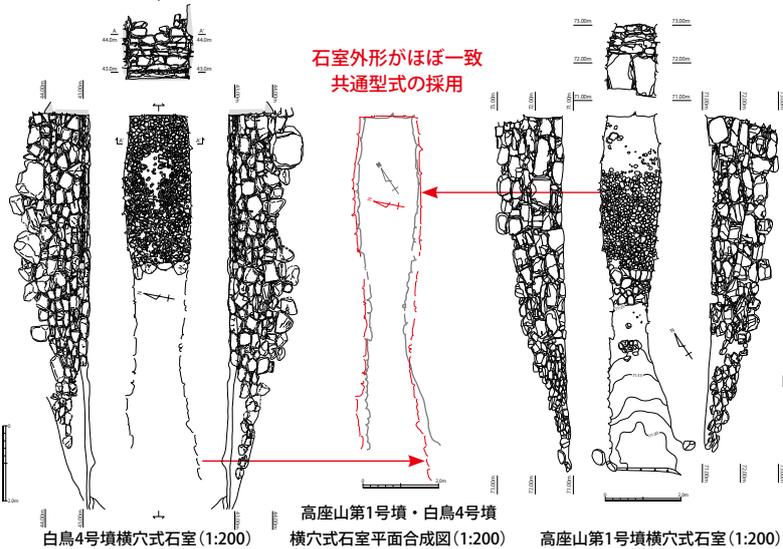
白鳥1号墳横穴式石室(1:200)



高座山[右]と東谷山[左]



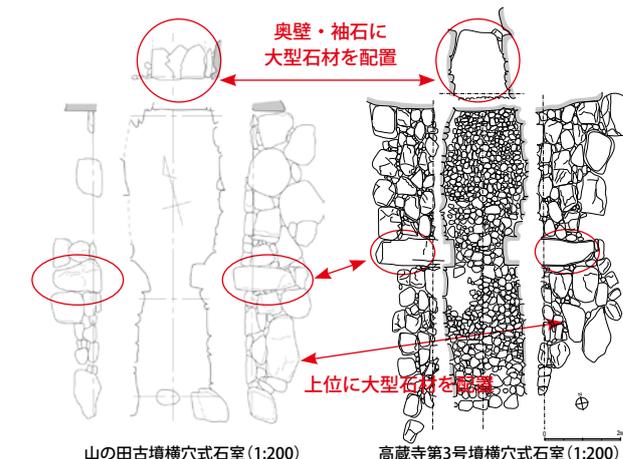
高座山・高蔵寺古墳群分布図(1:12,500)



白鳥4号墳横穴式石室(1:200)

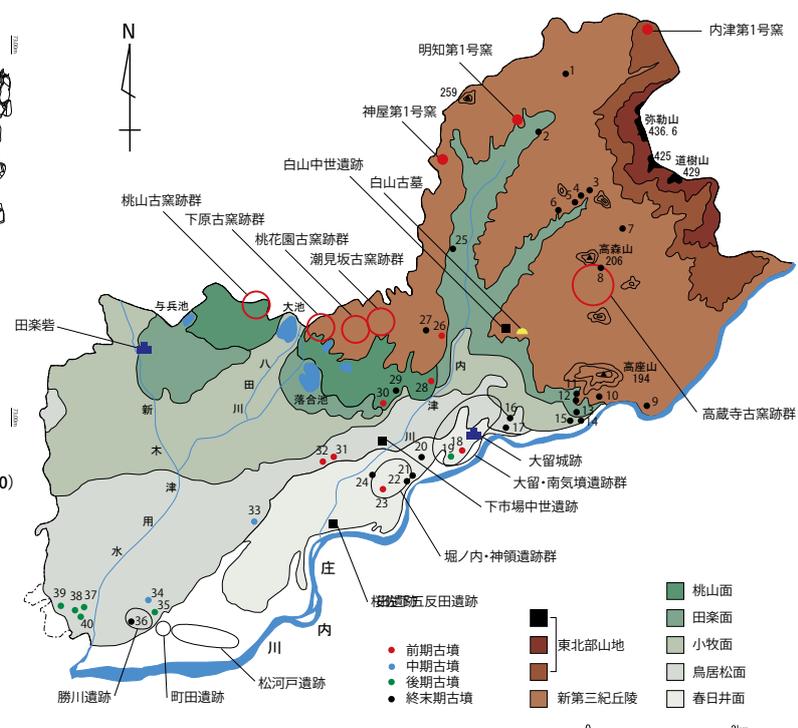
高座山第1号墳・白鳥4号墳
横穴式石室平面合成図(1:200)

高座山第1号墳横穴式石室(1:200)



山の田古墳横穴式石室(1:200)

高蔵寺第3号墳横穴式石室(1:200)



春日井市内の主要遺跡と高座山・高蔵寺古墳群

- 1: 次之下古墳 / 2: 明知第1号墳 / 3: 廻間第8号墳 / 4: 廻間第9号墳 / 5: 廻間第7号墳 / 6: 廻間第1号墳 / 7: 大久手古墳 / 8: 高森山古墳 / 9: 高蔵寺第5号墳 / 10: 高座山第1号墳 / 11: 高座山第3号墳 / 12: 高座山第2号墳 / 13: 高蔵寺第4号墳 / 14: 高蔵寺第3号墳 / 15: 高蔵寺第2号墳 / 16: 大垣戸狐塚古墳 / 17: 気噴第7号墳 / 18: 天王山古墳 / 19: 親王塚古墳 / 20: 大留荒子古墳 / 21: 三明神社古墳 / 22: 神領第1号墳 / 23: 高御堂古墳 / 24: 堀ノ内第1号墳 / 25: 神屋第1号墳 / 26: 富士社古墳 / 27: 猪之洞古墳 / 28: 出川大塚古墳 / 29: オフジ古墳 / 30: オセング古墳 / 31: 篠木第9号墳 / 32: 篠木第2号墳 / 33: 八事神明社古墳 / 34: 笹原古墳 / 35: 南東山古墳 / 36: 愛宕神社古墳 / 37: 白山神社古墳 / 38: 御旅所古墳 / 39: 春日山古墳 / 40: 二子山古墳



上：高蔵寺古墳群航空写真【昭和40年代】 下：石材転用を示す「矢穴」

高蔵寺古墳群 庄内川右岸に面した高座山山麓の段丘上、標高約50mに立地し、1～4号墳は高蔵寺町5・6丁目、5～7号墳は東へ約1.4kmの玉野町字塚本に所在し、分布域は大きく2地点に分かれる。昭和40～50年代の区画整理に伴い2～4号墳・土地改良に伴い5号墳が発掘調査され、3・5号墳が現存する。一方、1932年刊行の『高蔵寺町誌』は「…東谷山麓と共に最も古墳に富み…」、開墾・盗掘・石材転用のため多くを破壊したとし、近世の高蔵寺村絵図（製作年不詳）には4基の「塚」を描く。地元伝承では名古屋城の築城に際して大量の石材を持ち去ったといい、高蔵寺第3号墳には石材転用を示す石割用の「矢穴」が認められる。かつては現在確認する以上の古墳が存在したと考えられる。

高蔵寺古墳群の横穴式石室と副葬品 横穴式石室は擬似両袖式で、奥壁や袖石の規模（大型が小型化）・配石状況（縦位置1石+1段から横位置2石+複数段）を基に3号墳⇒2号墳⇒4号墳⇒5号墳への型式変化が比較的明瞭である。3号墳は奥壁に幅1.4m・高さ1.8mの1枚石（=鏡石）を配し、袖石も大型である。4号墳の奥壁は長形の大型石材が縦位置2石となり、上部に数段の石積みを行う。5号墳では奥壁・袖石ともに小型化し、奥壁は横位置2石・袖石は縦位置に配し上部に複数段の石積みを行う。袖は内部への突出も弱く、痕跡程度となり、石材規模の小型化に伴い玄室プランは胴張が弱く長方形に近いものから、胴張が強く奥壁・玄門に対して玄室中央の幅が大きく拡大する。

盗掘等により副葬品の多くが失われているが、須恵器の供膳具（蓋坏・高坏）と貯蔵具（脚付壺・広口短頸壺・提瓶・平瓶・甗）、装身具の金環、鉄製利器の直刀・刀子・鉄鏃が基本組成と考えられ、5号墳には馬具・鉄鐸・砥石が伴う。砥石は一端を欠くが、表面に明瞭な使用痕が残る。鉄鐸は1点のみで音を鳴らすための「舌」を欠くが、本来は複数個を1組とした祭器と推定される。鉄鐸は朝鮮半島に由来し、砥石や鉄器との共伴事例から、被葬者に鍛冶に関わる渡来系集団を想定する仮説もあり、極めて重要な遺物である。出土した須恵器は7世紀前葉から中葉を中心とし、短期間の内に古墳群が形成され、5号墳は7世紀後葉まで複数回の追葬が認められる。その後、新たな古墳が築造されることはなく、古墳時代は終焉を迎え、律令に基づく中央集権的な国家体制へと移行する。



「當高蔵寺町は隣村志段味村東谷山麓と共に最も古墳に富み一帯の古墳群を見る何れも圓墳にして山腹山麓に多く之を存す。（中略）之等古墳は今大部分破壊せられて元形を存すもの極めて少し。傳え聞く名古屋城築城の時石柳の岩石持ち去られしもの甚だ夥しと。猶開墾、盗掘等の為め破壊せられしもの亦多かるべく現に各所の石碑、石階、等に用ひられ。」
（『高蔵寺町誌』より一部抜粋）



高蔵寺第4号墳横穴式石室



高蔵寺第4号墳出土遺物



高蔵寺第4号墳発掘調査



高蔵寺第4号墳遺物出土状況



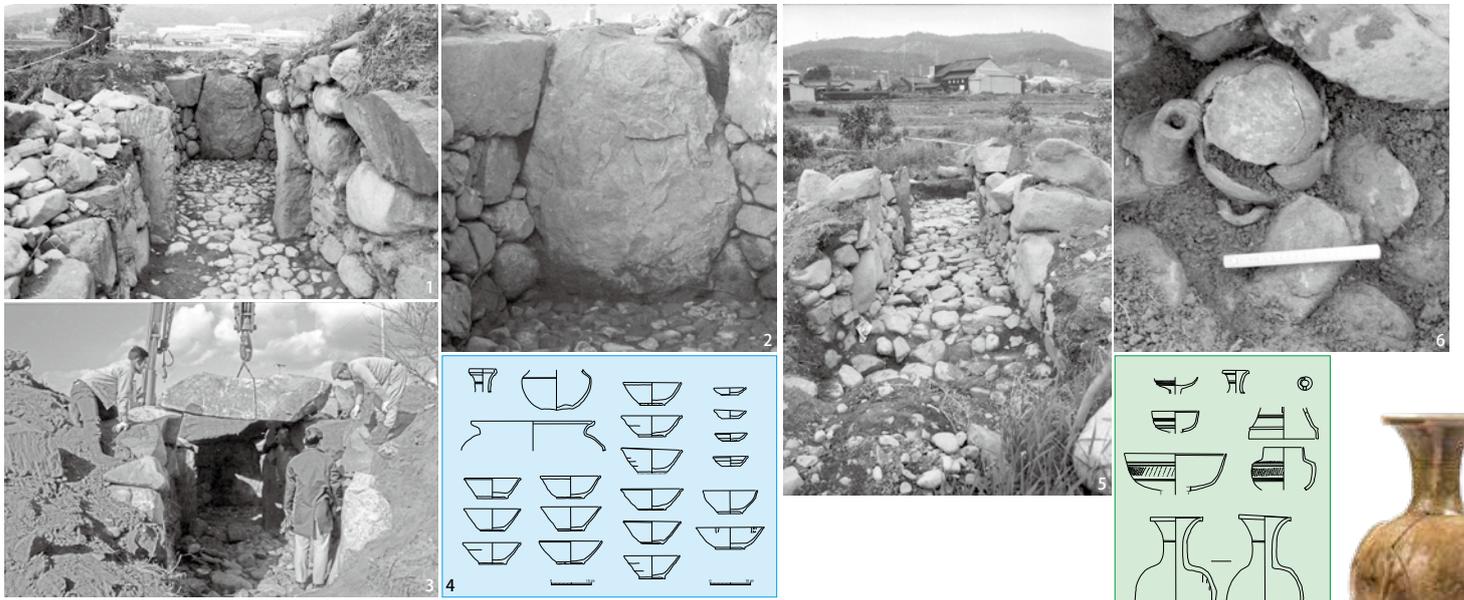
高蔵寺第5号墳出土砥石



高蔵寺第5号墳出土鉄鐸

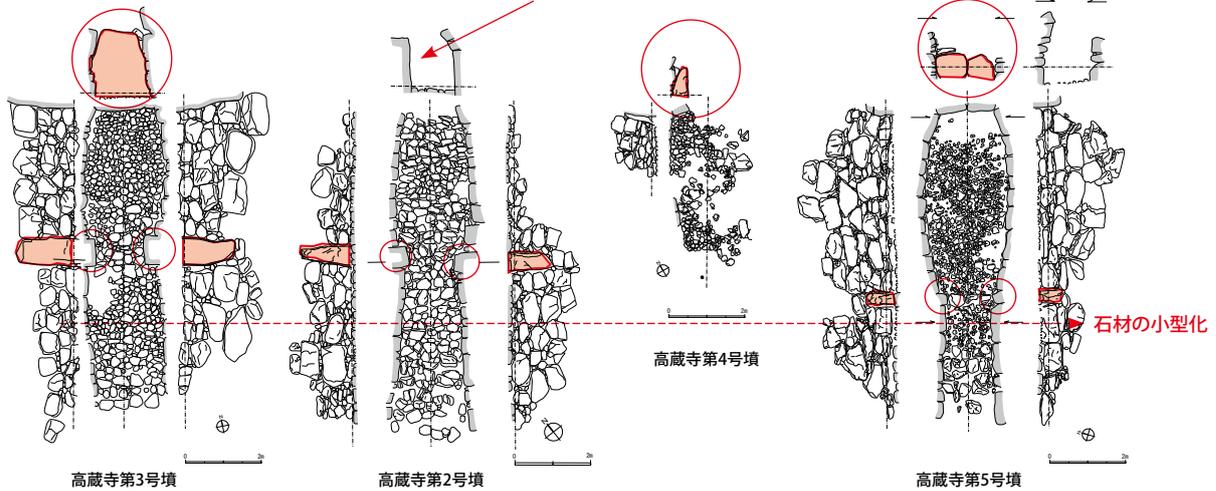


高蔵寺第5号墳出土鉄器【鉄鏃・刀子・馬具・直刀】



1:高蔵寺第3号墳横穴式石室全景/2:玄室奥壁拡大/3:復元整備工事・天井石の設置/4:高蔵寺第3号墳出土遺物実測図(須恵器・伊勢型鍋・山茶碗・山皿)
 5:高蔵寺第2号墳横穴式石室全景/6:細頸瓶出土状況/7:高蔵寺第2号墳出土遺物実測図(須恵器:無蓋高坏・提瓶・台付長頸瓶・細頸瓶)/8:細頸瓶

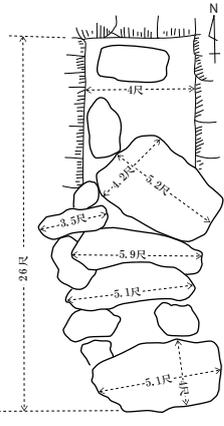
奥壁が失われているが、石材採取が目的とすると1枚石ないし縦置き2石の大型であった可能性が高い。



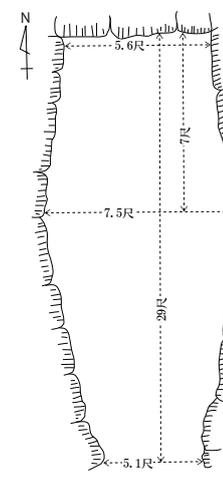
高蔵寺古墳群横穴式石室実測図(1:200)



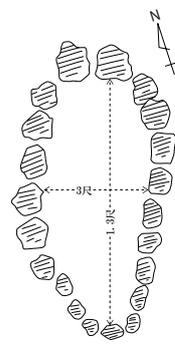
1:高蔵寺第5号墳須恵器出土状況/2:遺物検出作業/3:直刀出土状況/4:発掘調査作業/5:横穴式石室全景/6:高蔵寺第5号墳出土遺物集合



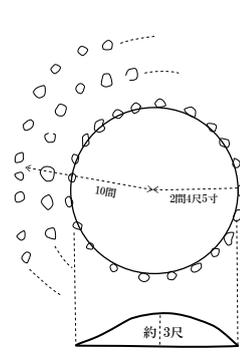
高倉山第一號古墳石廓平面図



高倉山第三號古墳平面図(石廓)



高倉山第五號古墳平面図(地上露出石廓)



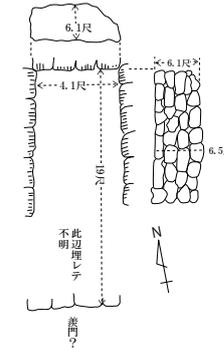
全石廓平面図



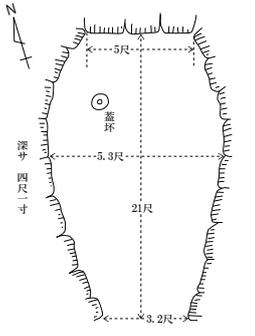
高座山第5号墳石室天井石



高座山第5号墳墳丘上石材散布(列石)



高倉山第一號古墳展開図



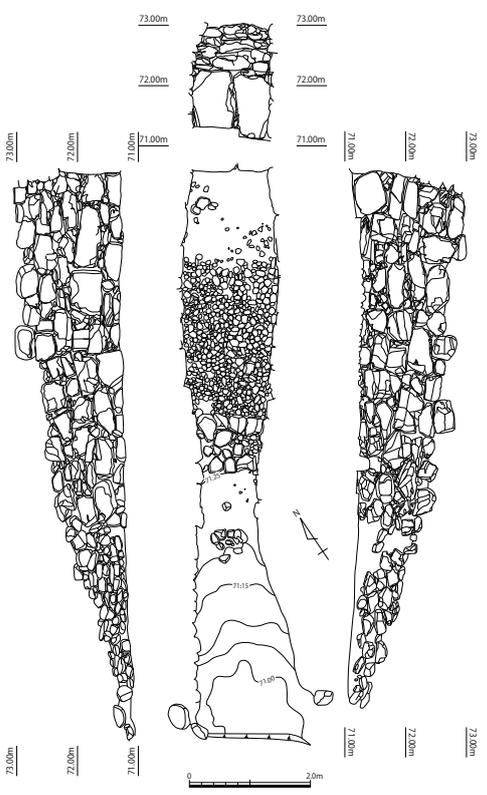
高倉山第四號古墳平面図

高座山古墳群 高座町字高座林に所在し、高座山山腹から南へ延びる3筋の尾根上の標高100m付近に2～4号墳・5号墳、70m付近に1号墳が点在する。『高蔵寺町誌』(1932年刊行)は高座山山中の古墳として6基[高倉山第一～五号墳・狐塚]の実測図を掲載する一方、相当数の古墳が半壊・滅失したとする。石室実測図はいずれも半壊の玄室を描き、一・二号墳は天井付近の上部の形態(本来は胴張型の可能性がある)、三・四号墳は基底石付近の胴張型のプランを表現し、五号墳は羨道のない堅穴式の小石塚である。現況との比定関係は、図の特徴から一号墳が高座山第1号墳・五号墳が高座山第2号墳・狐塚が高座山第5号墳となる。狐塚の平面図に描く同心円の列石について、具体的な構造は不明であるが、現在も20m級の墳丘上に石材が点在し、西向き開口の石室天井石が露出する。

高座山古墳群の横穴式石室と副葬品 庄内川流域の横穴式石室の多くは胴張型の玄室プランを主として、玄室・羨道の区界構造(袖石の有無)により擬似両袖式と無袖式に分類される。高座山では山中の高座山第1号墳が無袖式、段丘面の高蔵寺第2・3・5号墳が擬似両袖式であり、立地により石室型式が明瞭に分かれている。古墳群ごとに特有の石室型式を採用したことがうかがえ、被葬者一族の出自(地縁・血縁)や性格(職掌・身分)の違いが石室型式に反映したと考えられる。高座山における古墳群の形成は、東谷山に後出し、両地域に共通の石室型式の存在は東谷山(志段味古墳群)からの墓域の拡大や同一の造墓集団による築造(=設計規格の共有)等、直接的な影響が考えられる。古墳の動向をみる限り、庄内川を隔てた高座山・東谷山の両古墳群・地域間の関係は親和的で、葬送祭祀を共有した擬制的同族集団であったと推定される。

高座山第1号墳の発掘調査成果 道路拡幅工事に伴い平成18年に発掘調査を行い、その後滅失した。墳丘は直径約15.4m・推定高約3mの円墳で、主体部は南西方向に開口する横穴式石室である。葺石・周溝はなく、封土は暗褐色土・茶灰色土・赤茶褐色土を交互に盛土し、石室の構築と連動した1次墳丘(石室周囲の盛土)・2次墳丘(1次墳丘を覆う全体の盛土)による墳丘の構築手順が確認された。石室は、胴張型の玄室プラン・無袖式で、羨道に加え墳丘外部に通じる前庭部から成る。規模は全長8.82mを計測し、玄室は長さ4.04m・奥壁幅1.26m・最大幅1.6m、奥壁の残存高1.74mである。羨道は長さ1.9m・幅は玄門1.18m・羨門1.02mで、玄室よりわずかに狭まる。前庭部は長さ2.88mで、開口部の幅1.86mである。石室型式は志段味古墳群の白鳥1・4号墳と共通し、石積みや細部構造まで極めて類似性が高く、設計規格の共有=同一の造墓集団による築造と考えられる。

天井部からの侵入により内部が攪乱され、玄室内の副葬品は全てが失われていた。一方、羨道から前庭部にかけて閉塞石が遺存し、前庭部の床面から葬送祭祀に伴う土器類がまとまって出土した。器種組成は、須恵器の蓋坏(10点)・無蓋坏(3点)・広口短頸壺(5点)・提瓶(1点)に土師器の甕(1点)が加わる。いずれも細片化し、壺類では口縁部や胴部を打ち欠く等、祭祀の後に破碎したと考えられる。出土した須恵器には時期差があり、6世紀末葉～7世紀初頭の築造(初葬)、7世紀前葉の追葬が想定される。



高座山第1号墳 横穴式石室実測図(1:125)



高座山第1号墳出土須恵器



4



5



6



7

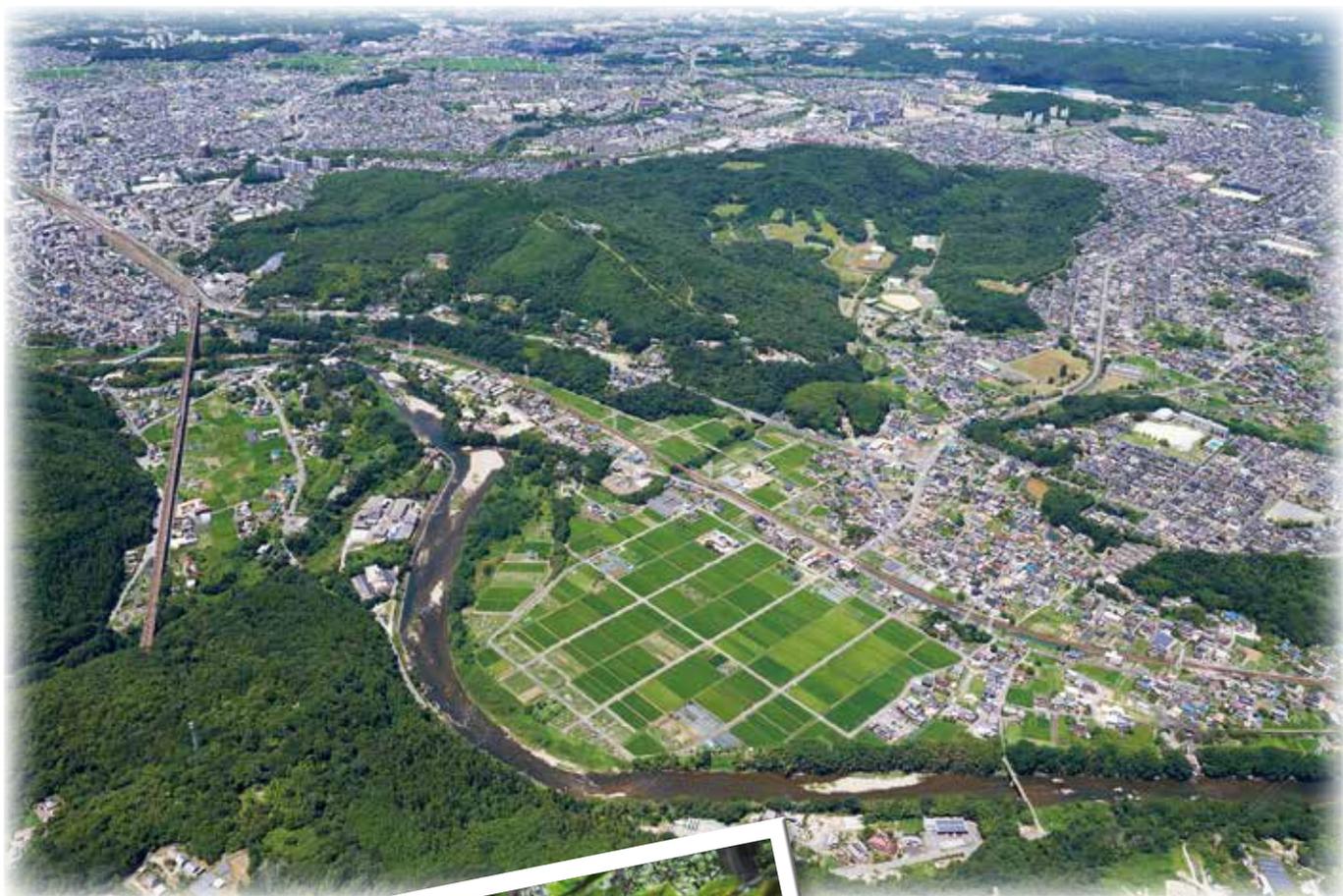


8



9

1:前庭部閉塞石検出状況/2:前庭部閉塞石直下遺物出土状況/3:前庭部閉塞石直下広口短頸壺出土状況/4:右側壁石積み状況/5:墳丘断削土層断面・左側壁背面1次墳丘の互層堆積/6:墳丘断削土層断面・奥壁背面1次墳丘の互層堆積/7:高座山第1号墳横穴式石室全景/8:高座山第1号墳墳丘全景/9:玄室奥壁・石積み拡大



高座山と周辺地形



神々の山 高座山[標高194m]と東谷山[標高198m]は、庄内川を隔てて右岸(春日井市)・左岸(名古屋市)に相対し、山頂に高蔵神社【註】・尾張戸神社が鎮座する。尾張戸神社は尾張氏の遠祖 天火明命(あめのみこと)・天香語山命(あめのかぐやまのみこと)・建稻種命(たけいなだねのみこと)の3柱を祀り、宮簀媛命(みやすひめのみこと)が勧請し、成務天皇5年の創建と伝える。

天香語山命 別名「高倉下命(たかくらじのみこと)」は高座山に降臨し、後に白鹿に乗って渡河、東谷山に移ったという。高座山山頂には磐座に相応しい長軸6mを越す巨岩が露頭するほか、『張州府志』では「俗云是熱田高蔵宮之奥院也」とし、両山は古来、神々にまつわる宗教色の濃い山であったことがうかがえる。地誌等の真偽は置くとして、尾張氏・熱田神宮との由縁を示す歴史的背景や地域性は、古墳群の動向とも相まって示唆的である。

【註】高蔵神社は創建年不詳。大正7(1918)年五社大明神社へ合祀。



高蔵神社社標



墳頂の小祠と背後の巨岩



高座山山頂の磐座に擬する巨岩